

仕合わせな老後のために

上 廣 榮 治

歳をとると、どうしても融通ゆうつうがきかなくなり、万事につけ、頑固がんこになる傾向があるようです。困ったことだと思っっているせいか、「頑固」という文字が、妙に目につくようになりました。

すると面白いことに、「頑固」という言葉が悪い意味だけで使われているのではないことに気づきました。「頑固な職人気質」といえば、一種のほめ言葉ですし、頑固寿司、頑固親父おやじの十割蕎麦そば、頑固豆腐とうふ、とんかつ頑固など、商品名や飲食店のキャッチフレーズにも「頑固」が幅をきかせています。

本来、「頑固」とは、他人の意見を聞こうとせず、世の中の変化を受け入れないで、かたくなに自分の考えや物事のやり方を変えないさまです。そのため、世に受け入れられず、円滑なコミュニケーションも成り立ちにくくなっているのですから、決してよい状態ではありません。

「頑迷固陋がんめいころう」といえば、かたくなで、理非をわきまえず、狭い了見に固執するという、ひどい悪口です。そもそも「頑」という字の意味が、「かたくな」「にぶい」「愚か」「片意地」「むさばる」「野蠻で無知」などというのですから、もう救いようがありません。

それなのになぜ、こんなにも「頑固」を売り物にした飲食店があるのでしょうか。たぶん、当店は時代の流行などには目もくれず、自分が善いと信じた味と調理法を「より善く」しようと、一途に努力していますと、胸を張って主張しているのでしょう。

そしてお客のほうも、かたくなではあっても、一途に「より善く」しようと努力する態度を評価し、受け入れているのです。

ちなみに、「頑固の反対語は「柔軟」です。そこで「頑固」の代わりに「柔軟」を入れてみると、柔軟寿司、柔軟親父の十割蕎麦、柔軟豆腐、とんかつ柔軟となつて、いかにも不味そうです。時代の変化に敏感に対応して味やサービスや店構えを次々と変えていく、そんな寿司屋や蕎麦屋やとんかつ屋の暖簾など、誰もくぐろうとはしないでしょう。昔ながらの味と雰囲気をしつかりと、かたくなに守ってくれている店のほうが、はるかに安心なのです。

ところで、『倫風』誌の昨年十一月号に、内閣府による世論調査の結果が載っていました。二十歳未満の若者に、同世代の人間の問題点を訊ねた結果なのですが、一位が「自己中心である」四〇・四％位が「自分の感情をコントロールできない」四〇・二％、三位が「忍耐力がなく、我慢ができない」三六・一％、次いで「人の痛みを感じない」三三・六％などとなっています。

「上位十位まで見ると、自己中心的で、感情のコントロールができず、我慢ができないという現代の若者像が浮かび上がってきます」とコメントされています。では、この若者たちと頑固者はどこが違つのでしょうか。

まず、頑固者は人の意見を聞こうとせず、自分の考え方ややり方を押し通しますから、「自己中心」という点では同じです。頑固者は「雷親父」などともいわれるように、「感情のコントロールができず、我慢ができない」点も若者たちと同じです。きつと、怒鳴られる「人の痛みも感じない」のでしょうか。

しかし、自己中心的な若者と頑固者の間には、根本的な大きな違いがあることも忘れてはなりません。頑固を謳^{うた}って、しかも受け入れられている店や、頑固でありながら尊敬されている人には、長い努力と豊富な経験によって磨き抜かれた「確かな見識と一途な生き方」が備わっているのです。

世の中がどんなに変わろうと、美味^{おい}しいものは美味しい、美しいものは美しいという確固たる信念において頑固な人、自分が選んだ一筋の道で「より善く」を目指して頑固に努力を続ける人、それが世に受け入れられる「善き頑固者」なのです。

一方、自己中心的な若者は、幼く拙い自分の頭で思いついたことに対して、かたくななのです。そこには、人を納得させるだけの見識も信念もありません。

では、何が確かな見識を磨き上げ、人に尊敬される生き方を築くのかといえば、ひとえに、学びに学ぶことと、多くの実体験を通して軌道修正を重ねることによつてです。

しかし、自己中心的な若者は、自己中心であるために、人から学ぼうとはいたしませんし、自分の非を認めて軌道を修正することもありません。彼には自分しか見えていないのです。しかも、経験というほどの経験もしていませんから、正否の判断も未熟です。

学ばず実体験にも乏しい自己中心的な若者と、学びに学んで、実体験を積み重ねてきた結果、「これでいいのだ。ほかに道はない」という域に達した「善き頑固者」の間には、千里の徑^{けい}庭があるのです。

さてそれでは、私の世代のように、年齢のせいで頑固になりつつある場合には、どうなのでしょう。ここにもまったく対照的な二つの頑固者のパターンがあるように思われます。

一つには、若い頃から試行錯誤を重ねながら、ついにただ一筋の道を発見して、その生き方をより高めようと努力し続けるうちに高齢に達して、融通がきかなくなった場合です。そして、もう一つは、そのときど

きの眼前の問題や世の流行に振り回されながら、気がつくとも頑迷な老人になっていたというケースです。

前者には、すでに今日と明日を生き抜く指針ができあがっています。たとえそれが一芸に限られたものであつたとしても、人生のどのような場面にも通用する普遍的な見識や、世間に通用する生き方が確立されているはずで、そのため、高齢によつて判断力や柔軟性が鈍つてきても、道を踏み誤ることはないでしょう。

しかし、後者には、今日と明日を過つことあやまなく生きるための指針も判断力もありません。年齢的な事情によつて、柔軟性を失い、拙い自分の判断に依怙地に固執しようとする、文字通りの頑迷固陋な老人です。怒りっぽく、説教好きで、わからず屋の、困つた存在。人に迷惑をかける頑固者です。

どのような人にも、老いは確実にやつてきます。仕合わせな老後を望み、頑迷固陋と後ろ指を差される惨めな老後を望まないなら、まだ間に合ううちに、しかもできるだけ早く、たとえ頑固になつても、それが、誰にでも納得してもらえる「善き頑固さ」であるような、しかるべき生き方を、身につけておく必要があります。そうです。

そして、誰にも納得してもらえない「しかるべき生き方」とは、「五つの誓」を頑固に守る生き方です。いつも上機嫌で、人の言葉を「ハイ」と受けて傾聴する。そんな生き方を頑固に守る老人が、不仕合わせになるはずはないのです。そんな頑固さなら、いくら頑固になつてもよいのです。

